

泉鏡花

繪本の春

正規表現版・藪野直史オリジナル注附

「やぶちゃん注」本篇は大正一五（一九二六）年一月発行の『文藝春秋』に初出し、後の昭和四（一九二九）年四月に改造社から刊行された作品集「昭和新集」に所収された。

底本は岩波旧全集（巻二十三・一九四二年刊）に拠った。但し、加工データとして嘗つて大変お世話になった（[私の鏡花の俳句集のこちら](#)）のものは、サイト主が贈って下さったものである）サイト「鏡花花鏡」で公開されていたもの（記憶では春陽堂版全集底本で、ルビに相違があるようであり、本文の異同もありそうである）を使用させて戴いた。ここに御礼申し上げる。

踊り字「く」は生理的に嫌いなので、正字化したが、その他の表示表記はルビに至るまでそのまま再現してある。リーダーも六点以外に三点・九点・十二点が混在する。

各段落末或いは適切なシークエンスの最後にポイント落ちで注を附した（最後に附した後注は本文と同ポイントとした）。複数注した箇所もあるので、視認し易くするために、採り上げた語句を太字で示した。

因みに、本テキスト注は、二〇〇五年六月二十六日の[サイト「鬼火」](#)開設の十七周年記念テキストとして公開することとした。【二〇二二年六月二十六日黄昏 藪野直史】

繪本の春

もとの邸町の、荒果てた土塀が今も其のまゝに成つて居る。……雪が消えて、まだ間もない、乾いたばかりの——山國で——石のごつごつした狭い小路が、霞みながら一條煙のやうに、ぼつと黄昏れて行く。

彌生の末から、些とづゝの遅速はあつても、花は一時に咲くので、その一ならびの塀の内に、桃、紅梅、椿も櫻も、或は満開に、或は初々しい花に、色香を装つて居る。石垣の草には、露の臺も萌えて居よう。特に桃の花を眞先に擧げたのは、むかし此の一廓は桃の組と云つた組屋敷だつた、と聞くからである。其の樹の名木も、まだ其方此方に残つて居て麗に咲いたのが……恁う目に見えるやうで、それが又如何にも寂しい。

二條ばかりも重なつて、美しい婦の虐げられた——舊藩の頃には何處でもあり來りだ——傳説があるからで。

通道と云ふでもなし、花は此の近處に名所ささへあるから、故とこんな裏小路を搜るものはない。日中も殆ど人通りはない。妙齡の娘でも見えようものなら、白晝と雖も、それは崩れた土塀から影を顯はしたと、人を驚かすであらう。

其の癖、妙な事は、いま頃の日の暮方は、その名所の山へ、絡繹として、花見、遊山に出掛けるのが、此の前通りの、優しい大川の小橋を渡つて、ぞろぞろと歸つて來る、男は膚脱ぎに成つて、手をぐたりとのめり、女が媚かしい友染の袂端折で、唧楊枝をした酔拂まじりの、浮かれ浮かれた人數が、前後に揃つて、此の小路をぞろぞろ通るやうに思はれる……まだ其の上に、小橋を渡る跽音が、左右の土塀へ、其處を蹈むやうに、とろとろと響いて、然もそれが手に取るやうに聞こえるのである。「やぶちゃん注」その名所の山へ、絡繹として、花見、遊山に出掛けるのが、此の前通りの、優しい大川の小橋を渡つて、ぞろぞろと歸つて來る」

「絡繹」は人馬の往来などが絶え間なく続くさま。さて、本篇も[前回公開した「葎の舞姫」](#)と同様に鏡花の故郷金沢がロケーションである。現行、金沢市内の桜の名所と言えば、兼六園と金沢城跡がまず上り、「大川」は「男川」の異名を持つ知られた犀川ととりたくなるが、鏡花の生家の石川県金沢市下新町（グーグル・マップ・データ。以下同じ）の位置を考えるなら、前者「名所の山」は[卯辰山公園](#)の桜で、後者「優しい大川」は大正八（一九一九）年に発表

した、「風流線」と並ぶ長編の名品「由縁の女」(これは長いが、いつか正規表現版では是非とも電子化したい優れた作品である)。「[Geolog Project](#)」によって元ページからアーカイブされた、加工データとしてお世話になっている「[鏡花花鏡](#)」

の中の、[ここ](#)で、縦書版全篇(PDF)が読める)の作中で、「女川」と表現した「麻野川」のモデル浅野川を指すと考えるべきである。同作の「二十一」章で、隠居に『土地では麻野川の流を麗しい女の姿、と言ひます。』と語らせ、以下、作中では、その「麻野川」を「二十四」章などで、『當地の大川ですよ、麻野川。』と『大川』と別称しており、而して極めつけは「三十九」章で、主人公の詩人禮吉が、川漁師に、稀にしか獲れない、鮎の中でもレアな個体について尋ねるシーンで、漁師が、『此の麻野川に限るだよ。此の川は水が柔かうて、蒼い瀬も、柳の葉の流れるやうだで、俗に女川と言ふだがね、限つて此の水に居る魚でね。菊鮎と言ふだけれど、』と答えるのである。というより、本篇を最後まで読めば、それは自ずと明らかになるように仕掛けられてあるのである(現在、浅野川を別名として「女川」と呼ぶようになったのは、この鏡花の「由縁の女」によるネーミングに由るとされる。なお、やや離れた金沢城跡の南側を並走して貫流する、やや太い「犀川」の別名を「男川」と呼んでいるのは、この「女川」の対名称と考えられる。』

——此のお話をする、いまでも私は、まざまざと其の景色が目に浮ぶ。——
處、いま言つた古小路は、私の家から十町餘りも離れて居て、縁で視めても、二階から伸上つても、それに……地方の事だから、板葺屋根へ上つて眺しても、實は建連つた賑な町家に隔てられて、その方角には、橋はもとよりの事、川の流も見えないし、小路などは、たとひ見えても、松杉の立木一本にもかくれて了ふ。……第一見えさうな位置でもないのに——いま言つた黄昏になる頃は、いつも、窓にも縁にも一杯の、川向うの山ばかりか、我が家の町も、門も、欄干も、襖も、居る疊も、あゝあゝ我が影も、朦朧と見えなく成つて、國中、町中に唯一條、其の桃の古小路ばかりが、漫々として波の靜な蒼海に、船脚を曳いたやうに見える。見えつゝ、面白さうな花見がへりが、ぞろぞろ橋を渡る蹺音が、約束通り、とととと、どど、ごろごろと、且つ亂れて其處へ響く。……幽に人聲——女らしいものも、ほゝゝ、と聞こえると、緋桃がぱつと色に亂れて、夕暮の櫻もはらはらと散りかゝる。……

直接に、そとに其處へ行き、小路へ入ると、寂しがつて、氣味を惡がつて、誰も通らぬ、更に人影はないのであつた。

氣勢はしつゝ、……橋を渡る音も、隔つて、聞こえはしない。……

桃も櫻も、眞赤な椿も、濃い霞に包まれた、朧も暗いほどの土塀の一處に、石垣を攀上るかと思つて、……つゝじ、藤にはまだ早い、——荒庭の中を覗いて居る——緋の筒袖を着た、頭の圓い小柄な小僧の十餘りなのがぼつん見える。

其奴は、……私だ。

夢中でぼかんとして居るから、もう、とつぷり日が暮れて塀越の花の梢に、朧月のやゝ斜なのが、湯上りのやうに、薄くほんのりとして覗くのも、そいつは知しらないらしい。

丁ど吹倒れた雨戸を一枚、拾つて立掛けたやうな破れた木戸が、裂めだらけに閉してある。其處を覗いて居るのだが、枝ごし葉ごしの月が、ぼうとなどつた白紙で、木戸の肩に、「貸本」と、かなで染めた、それがほのかに讀まれる——紙が樹の隈を分けた月の影なら、字もたゞ花と荅を持った、桃の一枝であらうも知れないのである。

其處へ……小路の奥の、森の覆つた中から、葉をざわざわと鳴らすばかり、背の高い、色の眞白な、大柄な婦が、横町の湯の歸途と見える、……化粧道具と、手拭を絞つたのを手にして、陽氣は此だし、のぼせもした、……微酔もそのまゝで、ふらふらと花をみまはしつゝ近づいた。

巢すから落ちた木菟の雛ツ子のやうな小僧に對して、一種の大なる化鳥である。大女の、わけて櫛巻に無雜作に引束ねた黒髪の方々とした濡色と、色の白さは目覺ましい。

「おやおや……新坊。」

小僧は矢張り夢中で居た。

「おい、新坊。」

と手拭で頬邊を、つるりと撫でる。

「あッ。」

と肝を消して、

「まあ、小母さん。」

ペソを搔いて、顔を見て、

「御免なさい。御免なさい。父さんに言つては可厭だよ。」

と、あはれみを乞ひつゝ言つた。

不氣味に凄い、魔の小路だと言ふのに、婦が一人で、湯歸りの捷道を怪しんでは不可ない。……實は此の小母さんだから通つたのである。

つい、(乙)の字なりに畝つた小路の、大川へ出口の小さな二階家に、獨身で住まつて、門に周易の看板を出して居る、小母さんが既に魔に近い。婦で卜筮をするのが怪しいのではない。小僧は、もの心ついた四つ五つ時分から、親たちに聞いて知つて居る。大女の小母さんは、娘の時に一度死んで、通夜の三日の眞夜中に蘇生つた。その時分から酒を飲んだから酔つて轉寢でもした氣で居たらう。力はあるし、棺桶をめりめりと鳴ならした。それが高島田だつたと云ふから尙ほ希有である。地獄も見て來たよ——極樂は、お手のものだ、と卜筮ごときは掌である。且つ寺子屋仕込みで、本が讀める。五經、文選すらすらで、書がまた好い。一度冥途を彷徨つてからは、佛教に親んで參禪もしたと聞く。——小母さんは寺子屋時代から、小僧の父親とは手習傍輩で、然う毎々でもないが、時々は往來をする。何ぞの用で、小僧も使ひに遣られて、煎餅も貰へば、小母さんの易をとり七星を刺繡した黒い幕を張つた部屋も知つて居る、その往戻りから、フト此のかくれた小路をも覺えたのであつた。「やぶちゃん注…『高島田』明治時代は嫁入り前の若い女性の正装の髪型として流行つた。まず、二十歳前の年齢のニュアンスでよいだろう。『希有』『茸の舞姫』でも注したが、『稀有』の「けう」が変化した語で、意味は特化して「不思議なさま・奇妙なさま」の意で、近世に既に出現しており、鏡花はよく使う。」

此の魔のやうな小母さんが、出口に控へて居るから、怪い可恐しいものが顯はれようとも、それが、小母さんのお夥間の氣がするのために、何となく心易くつて、いつの間にか、小兒の癖に、場所柄を、然して憚らないで居たのである。が、學校をなまけて、不思議な本戸に、「かしほん」の庭を覗くのを、父親の傍輩に見つかつたのは、天狗に逢つたほど可恐しい。「やぶちゃん注…『お夥間』『御仲間』。夥しい同類・眷屬。鏡花は好んで用いる。「尋常でない集団」「異形の賊群」「怪かしの群れ」と言つたニュアンスをこの字に込めたようである。」

「内へお寄り。……さあ、一緒に。」

優しく背を押したのだけれども、小僧には襟首を抓んで引立てられる氣がして、手足をすくめて、宙を歩行いた。

「肥^{ふと}つて居^ゐても湯^ゆざめがするよ。——もう春^{はる}だがなあ、夜^{よる}はまだ寒^{さむ}い。」

と、納^{なんど}戸^どで被^ひ布^ふを着^きて、朱^{しゆ}の長^{なが}煙^{えん}管^{くわん}を片^{かた}手^てに、

「新^{しん}坊^{ぼう}、——あんな處^{ところ}に、一^{ひとり}人^{にん}で何^{なに}をして居^ゐた?……小^を母^ばさん^{さん}が易^{えき}を立^たてゝ見^みてあげよう。二^に階^{かい}へおいで。」「やぶちゃん注:「被^ひ布^ふ」着^き物^{ぶつ}の上^{うへ}に着^きる、羽^う織^しに似^にた外^{がい}衣^い。襟^{えり}もととを四^よ角^{かく}に空^くけ、胸^{むね}のと

ころで、左^{ひだり}右^{みぎ}を深^{ふか}く合^あわせ、組^{くみ}み紐^{ひも}で留^{とど}める。江^え戸^ど時^じ代^{だい}は茶^ち人^{にん}・俳^ひ人^{にん}などが着^きたが、明^{めい}治^し以^い後^ごは変^{へん}形^{けい}し、主^まに女^め性^{せい}の和^わ装^{さう}用^{よう}コ^こートとなつた。参^{さん}照^{しやう}した「[goo 辞書](#)」のこ^こに絵^えが載^のる。」

月^{つき}、星^{ほし}を左^{ひだり}右^{みぎ}の幕^{まく}に、祭^{さい}壇^{だん}を背^せにして、詩^し經^{きやう}、史^し記^き、二^に十^{じふ}一^{いつ}史^し、十^{じふ}三^{さん}經^{きやう}注^{ちゆ}疏^そなんど本^{ほん}箱^{ばう}がづらりと並^{なら}んだ、手^て習^{しやく}机^きを前^{まへ}に、づしりと一^{いつ}杯^{ぱい}に、座^ざ蒲^ふ團^{だん}に坐^{すわ}つて、蔽^{おひ}のかゝつた火^ひ桶^けを引^ひ寄^{きよ}せ、顔^{かほ}を見^みて、ふとつた頬^ほでニタニタと笑^{わら}ひながら、長^の閑^{どか}に煙^{たばこ}草^{そう}を吸^すつたあとで、圓^{まる}い肘^{ひぢ}を白^{しろ}くついて、あ^あの天^{てん}眼^{がん}鏡^{きやう}と云^いふのを取^とつて、ぴつたりと額^{ひたい}に當^あてられた時^{とき}は、小^こ僧^{ぞう}は悚^{ぞつ}然^{ぜん}として震^{ふる}上^{あが}つた。「やぶちゃん注:「二^に十^{じふ}一^{いつ}史^し」中国^{ちゆうごく}歴^{れき}代^{だい}の正^{せい}史^し二^に十^{じふ}一^{いつ}書^{しよ}。「史^し記^き」・「漢^{かん}書^{しよ}」・

「後^ご漢^{かん}書^{しよ}」・「三^{さん}国^{こく}志^し」・「晋^{しん}書^{しよ}」・「宋^{そう}書^{しよ}」・「南^{なん}齊^{せい}書^{しよ}」・「梁^{りやう}書^{しよ}」・「陳^{ちん}書^{しよ}」・「魏^{ゐい}書^{しよ}」・「北^{ぺい}齊^{せい}書^{しよ}」・「周^{しゆ}書^{しよ}」・「隋^{ずい}書^{しよ}」・「南^{なん}史^し」・「北^{ぺい}史^し」・「新^{しん}唐^{たう}書^{しよ}」・「新^{しん}五^ご代^{だい}史^し」・「宋^{そう}史^し」・「遼^{りやう}史^し」・「金^{きん}史^し」・「元^{げん}史^し」を指^さす。王^{わう}朝^{てう}が不^ふ明^{めい}な方^{かた}は参^{さん}照^{しやう}した「[goo 辞書](#)」のこ^こで全^{ぜん}二^に十^{じふ}一^{いつ}書^{しよ}がリ^りン^くクさ^されてあ^あるの^ので見^みられたい。「十^{じふ}三^{さん}經^{きやう}注^{ちゆ}疏^そ」中国^{ちゆうごく}の儒^{にゆ}教^{きやう}の基^き本^{ぽん}的^{てき}古^こ典^{てん}である經^{けい}書^{しよ}の注^{ちゆ}釈^{しやく}を集^{しふ}めた叢^{そう}書^{しよ}。全^{ぜん}四^し百^{ひやく}十^{じふ}六^{ろく}卷^{わん}。「詩^し經^{きやう}（毛^{まう}詩^し）」・「書^{しよ}經^{きやう}（尚^{しやう}書^{しよ}）」・「易^い經^{きやう}（周^{しゆ}易^い）」・「礼^{らい}記^き」・「周^{しゆ}礼^{らい}」・「儀^ぎ礼^{らい}」・「春秋^{しゆんしゅう}左^さ氏^し伝^{でん}」・「春秋^{しゆんしゅう}公^{こう}羊^{やう}伝^{でん}」・「春秋^{しゆんしゅう}穀^{こく}梁^{りやう}伝^{でん}」・「論^{ろん}語^ご」・「孝^{きやう}經^{きやう}」・「爾^じ雅^が」・「孟^{もう}子^し」の十^{じふ}三^{さん}經^{きやう}の注^{ちゆ}疏^そ。紀^き元^{げん}前^{ぜん}二^に世^{せい}紀^きの前^{ぜん}漢^{かん}武^ぶ帝^{てい}の時^{とき}、儒^{にゆ}教^{きやう}が国^{こく}教^{きやう}化^かされ、「易^い」・「書^{しよ}」・「詩^し」・「礼^{らい}」・「春秋^{しゆんしゅう}」の五^ご經^{きやう}を担^{たん}当^{たう}する博^{はく}士^し官^{くわん}（五^ご經^{きやう}博^{はく}士^し）が置^おか^かれた。以^い来^{らい}、經^{きやう}書^{しよ}の研^{けん}究^{きゆう}解^{かい}釈^{しやく}が盛^{さか}んに行^いわれ、殊^{こと}に後^ご漢^{かん}から魏^{ゐい}晋^{しん}南^{なん}北^{ぺい}朝^{てう}時^じ代^{だい}にか^かけて、多^{おほ}くの注^{ちゆ}、及^{およ}び、その注^{ちゆ}をより詳^{しやう}しくした疏^そが作^{さく}られ、經^{きやう}書^{しよ}解^{かい}釈^{しやく}の多^{おほ}様^{やう}化^かが齎^{いた}された。」

大^{おほ}川^{かは}の瀬^せがさつと聞^きこえて、片^{かた}側^{がは}町^{まち}の、岸^{きし}の松^{まつ}並^{なみ}木^きに風^{かぜ}が渡^{わた}つた。

「……かし本^{ほん}。——ろくでもない事^{こと}を覺^{おぼ}えて、此^{こゝろ}奴^{やつ}が。こ^こんな變^{へん}な場^ば處^{しよ}まで捜^{さが}しまはるやうでは、彼^{あそこ}處^{こゝ}、此^{こゝ}處^{こゝ}、町^{まち}の本^{ほん}屋^やをあら方^{かた}あらしたに違^{ちが}ひない。道^{だう}理^りこそ、お父^{とつ}さん^{さん}が大^{たい}層^{そう}な心^{しん}配^{ぱい}だ。……新^{しん}坊^{ぼう}、小^を母^ばさん^{さん}の膝^{ひざ}の傍^{そば}へ。——氣^きをはつきりとし^しないか。えい、あんなうらどべい^{うらどべい}裏^{うら}土^ど堀^{ぼり}の壊^{こは}れ木^き戸^どに、か^かしほ^しん^{しん}の貼^{はり}札^{ふだ}だ。……そんなものがあるものかよ。いまも現^{げん}に、小^を母^ばさん^{さん}が、おや、新^{しん}坊^{ぼう}、何^{なに}をして居^ゐる、と少^{しば}時^じ熟^{じやく}と視^みて居^ゐたが、そ^そんなは^はり紙^{がみ}は氣^きも影^{かげ}もなかつたよ。——何^{なん}だ^だとえ?……晝^{ひる}間^ま來^きて見^みると何^{なん}にもない。……日^ひの暮^{くれ}から、夜^{よる}へ掛^かけてよく見^みえ^えると。——それ、それ、それ見^みな、こ^これ、新^{しん}坊^{ぼう}。坊^{ぼう}が立^たつて居^ゐた、あ^あの土^ど堀^{ぼり}

の中は、もう家が壊れて草ばかりだ、誰も居ないんだ。荒庭に古い祠が一つだけ残つて居る……」

と言ひかけて、ふと獨で頷いた。

「こいつ、學校で、勉強盛りに、親がわるいと言ふのを聞かずに、夢中に成つて、餘り凝るから魔が魅した。ある事だ。……枝の形、草の影でも、かし本の字に見える。新坊や、可恐い處だ、彼處は可恐い處だよ。——聞きな。——おそろしく成つて歸れなかつたら、可い、可い、小母さんが、町の坂まで、此の川土手を送つて遣らう。

——舊藩の頃にな、あの組屋敷に、忠義がつた侍が居てな、御主人の難病は、巳巳巳巳、巳の年月の揃つた若い女の生肝で治ると言つて、——よくある事さ。いづれ、主人の方から、内證で入費は出たらうが、金子にあかして、其の頃の事だから、人買の手から、その年月の揃つたと言ふ若い女を手に入れた。あらう事か、俎はなからうよ。雨戸に、その女を赤裸で鋸で打つたとな。……これこれ、まあ、聞きな。……眞白な腹をずぶずぶと刺いて開いた……待ちな、あの木戸に立掛けた戸は、その雨戸かも知れないよ。」「やぶちゃん注：「巳巳巳巳、巳の年月の揃つた」巳年の巳の月の巳の日の巳の刻生まれであることを言う。

「鋸」材木と材木とを繋ぎ止めるために打ち込む両端が「コ」の字形に曲がつた大釘。」

「う、う、う。」

小僧は息を引くのであつた。

「酷たらしい話をすると思ひでない。——聞きな。さてとよ……生肝を取つて、壺に入れて組屋敷の陪臣は、行水、嗽に、身を潔め、麻上下で、主人の邸へ持つて行く。お傍醫師が心得て、……此だけの藥だもの、念のため、生肝を、生のもので見せてからと、御前で壺を開けるとな。……血肝と思つた眞赤なのが、糠袋よ、なあ。麝香人の匂袋でもある事が——坊は知るまい、女の膚身を湯で磨く……氣取つたのは鶯のふんが入る、糠袋が、それでも、殊勝に、思はせぶりに、びしよびしよぶよと濡れて出た。いづれ、身勝手な——病のために、女の生肝を取らうとするやうな殿様だもの……またものは、歸つて、腹を割いた婦の死體をあらためる隙もなしに、やあ、血みどれに成なつて、まだ動いて居まする、とおのが手足を、ばたばたと遣りながら、お目通り、庭前で斬られたのさ。

いまの祠は……だけれど、その以前からあつたと言ふが、其のあとの邸だよ。尤も、幾度も代は替つた。

——餘りな話と思はうけれど、昔ばかりではないのだよ。現に、小母さんが覺えた、……こゝへ一昨年越して來た當座——夏の、しらしらあけの事だ。——あの土堀の處に人だかりがあつて、がやがや騒ぐので行つて見た。若い男が倒れて居てな、……用向うの新地歸りで、——小母さんも一寸見知つて居る、些とたりないほどの色男なんだ——それが……醫者も驅附けて、身體を檢べると、あんぐり開けた、口一杯に、紅絹の糠袋。」

「……………」「やぶちゃん注…『用向うの新地歸り』『新地』は、その多くが新開地に作られたところから、『遊里』を指す。さすれば、『用向うの』は、『用向きの』で「それ、若い男の、よんどころない用のある、あそこの新地からの歸りがけだったのさ。」という「小母さん」の換喩である。なお、前注で示した鏡花の実家のある下新町に接する北東が明治になって新しく出来た花街「主計町茶屋街」であり、その浅野川の対岸（右岸）の少し東方が古く江戸時代からあつた花街「ひがし茶屋街」である。ここは「新坊」が鏡花自身がモデルであるから、まさに文字通りの「新地」でもあつた前者であろうと私には思われる。これらの花街の形成については、『茸の舞姫』の第「六」章の、「くらがり坂」の注（19コマ目）で述べておいたので、そちらを見られたい。」

「糠袋を頬張つて、それが咽喉に詰つて、息が塞つて死んだのだ。どうやら手が届いて息を吹いたが、……あとで聞くと、月夜にこの小路へ入る、美しいお嬢さんの、湯歸りのあとをつけて、そして、何だよ、無理に、何、あの、何の眞似だか知らないが、お嬢さんの舌をな。」

と、小母さんは白い顔して、ぺろりと其の眞赤な舌。

小僧は太い白蛇に、頭から舐められた。

「その舌だと思つたのが、咽喉へつかへて氣絶をしたんだ。……舌だと思つたのが、糠袋。」

と又、ぺろりと見せた。

「厭だ、小母さん。」

「大丈夫、私がついて居るもんだもの。」

「然うぢやない。……小母さん、僕もね、あすこで、きれいなお嬢さんに本を借りたの。」
「あ。」

と圓い膝に、揉み込むばかり手を据ゑた。

「もう、見たかい。……えゝ、高島田で、紫色の衣を着た、美しい、氣高い……十八九の。……あゝ、惡戯をするよ。」

と言つた。小母さんは、そのおぼけを、魔を、鬼を、——あゝ、惡戯をするよ、と獨言して、その時はじめて眞顔に成つた。「やぶちゃん注…「糠袋を頬張つて、それが咽喉に詰つて、息が塞つて死んだのだ。どうやら手が届いて息を吹いたが」古文では、氣絶することをしばしば「死んだ」と表現するのは常套だが、ここはこの「小母さん」の語りという点に於いて、何らの違和感はないのである。既に語られた通り、彼女は若い時に二度死んで、通夜の三日に蘇生した経験の持ち主なればこそ、まさにこれは正統な正規表現なのである。」そして、何だよ、無理に、何、あの、何の眞似だか知らないが、お嬢さんの舌をな」言わずもがなであるが、新坊のために描写を略しているが、この男は、そのお嬢さんに無理矢理、飛びついて、接吻し、舌を吸つたのである。」

私は今でも現ながら不思議に思ふ。晝は見えない。逢魔が時から臃にもあらずして解る。が、夜の裏木戸は小兒心にも遠慮される。……かし本の紙ばかり、三日五日續けて見て立つと、その美しいお嬢さんが、他所から歸つたらしく、背へ來て、手をとつて、荒た寂しい庭を誘つて、その祠の扉を開けて、燈明の影に、繪で知つた鎧びつのやうな一具の中から、一冊の草双紙を。……

「——繪解をしてあげますか……（註。草双紙を、幼いものに見せて、母また姉などの、話してきかせるのを繪解と言つた。）——讀めますか、假名ばかり。」

「はい、讀めます。」

「いゝ、お兒ね。」

きつね格子に、其の半身、やがて、朧たけた顔が覗いて、見送つて消えた。「やぶちゃん注…「きつね格子」狐格子。「木連れ格子」「妻格子」等とも呼称する。屋根の妻（切妻や入母屋の屋根の側面の三角形の壁面部分）の飾りの一つで、格子の内側に板を張つたもの。」

その草双紙である。一冊は、夢中で我が家の、階子段を、父に見せまいと、驅上る時に、——歸つたかと、聲がかゝつて、ハツと思ふ、……懷中に、どうしたか失せて見えなく成つた。たゞ、内へ歸るのを待兼ねて、大通りの露店の灯影に、歩行きながら、ちらちらと

見た、繪と、かながきの處は、——こゝで小母さんの話した、——後のでない、前の
已巳巳の話であつた。

私は今でも、不思議に思ふ。そして面影も、姿も、川も、たそがれに油を敷いたやう
に目に映る。……

大正三年の月中旬、大雨の日の午の時頃から、其の大川に洪水した。——水が軟
に綺麗で、流が優しく、瀬も荒ないと云ふので、——昔の人の心であらう——名の上へ
女をつけて呼んだ川には、不思議である。

明治七年七月七日、大雨の降續いた其の七日七晩めに、町のもう一つの大川が可恐い
洪水した。七の数が累なつて、人死も夥しいかつた。傳説じみるが事實である。が、其
の時さへ此の川は、常夏の花に紅の口を漱がせ、柳の影は黒髪を解かしたのであつたに——
——「やぶちゃん注：『町のもう一つの大川』犀川。卷末の最終注も参照のこと。」

尤も、話の中の川堤の松並木が、やがて柳に成つて、町が目貫へ續く處に、木造の
大橋があつたのを、此の年、石に架けかへた、工事七分と云ふ處で、橋杭が鼻の穴のやう
に成つたため水を驚かしたのであらうも知れない。

僥倖に、白晝の出水だつたから、男女に死人はない。二階家は其のまゝで、辛うじて凌
いだが、平屋は殆ど濁流の瀬に洗はれた。

若い時から、諸所を漂泊つた果に、其の頃、やつと落着いて、川の裏小路に二階借した
小僧の叔母にあたる年寄がある。

水の出盛つた二時半頃、裏向の二階の肱掛窓を開けて、立ちも遣らず、坐りもあへず、
あの峰へ、と山に向つて、膝を宙に水を見ると、肱の下なる、廂屋根の屋根板は、鱗の
やうに戦いて、——北國の習慣に、壓にのせた石の數々は僅かに水を出た磧であつた。

つい目の前を、あゝ、島田鬚が流れる緋鹿子の切が解けて浮いて、トちらりと見たのは、
一條の眞赤な蛇。手箱ほど部の重つた、表紙に彩色繪の草紙を巻いて——鼓の轉がるや
うに流れたのが、忽ち、紅の雫を擧げて、其の並木の松の、就中、山より高い、二三
尺水を出た幹を、ひらひらと昇つて、聲するばかり、水に咽んだ葉に隠れた。——瞬く

間である。――

そこら、屋敷小路の、荒廢離落した低い崩土堀には、凡そ何百年來、いかばかりの蛇が巢くつて居たらう。蝮が多くて、水に浸つた軒々では、その害を被つたものが少なくない。

高臺の職人の屈竟なのが、二人、翌日、水の引際を、炎天の下に、大川添を見物して、流の末一里有餘、海へ出て、暑さに泳いだ豪傑がある。

荒海の磯端で、肩を合はせて一息した時、息苦しいほど蒸暑いのに、颯と風の通る音がして、思はず背筋も悚然とした。……振返ると、白濱一面、早や乾いた蒸氣の裡に、透なく打つた細い杭と見るばかり、幾百條とも知れない、おなじやうな蛇が、おなじやうな狀して、おなじやうに、揃つて一尺ほどづつ、砂の中なかから鎌首を擡げて、一齊に空を仰いだのであつた。その畝る時、齒か、鱗か、コツ、コツ、カタカタカタと鳴つて響いた。――洪水に卷かれて落ちちつゝ、はじめて柔い地を知つて、砂を穿つて活きたのであらう。

きやつ、と云ふと、島が眞中から裂けたやうに、二人の身體は、濱へも返さず、浪打際をたゞ礫のやうに左右へ飛んで、裸身で逃げた。

「やぶちゃん注…以上で本篇は終わっている。以下は、コードの、あたかも作者が幕外の芝居、或いは、樂屋落ちでモノログするかのような「大正」で始まるパートの頭三つの段落の、ある複数の歴史的事実との相似性と、逆に事実ではない齟齬とに気づいたので、項目毎に改行して注することとする。再度、言っておくと、本篇は大正一五（一九二六）年一月に公開されている。なお、公開後、何故か判らないのだが、以下の部分に埋め込んだリンクだけが、どんなことをしても、機能しないことが判つたため、緊急避難として当該アドレスを直後に示すこととした（それでもグーグル・マップ・データはそれでも結果してダメなので、カットした）。五月蠅いが我慢されたい。

「大正…年…月の中旬、大雨の日の午の時頃から、其の大川に洪水した」「中旬」は合わないが、本篇発表の凡そ三年半程前の大正一一（一九二二）年八月三日、金沢測候所開設以来の大雨によって、犀川に架かる橋は全部が、浅野川は天神橋を除いて全部が流出し、犀川の堤防は六十ヶ所が決壊、市内の浸水家屋四千戸に及んだと、国立国会図書館の「レファレンス協同データベース」の

https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000225459

回答にあるのが、モデルであろう。ここでは年月が伏せられてあり、実際のそれと日付がずらされてあるのは、幻想作家として、実際の比較的直近の事実災害をそのままに充てることは、被災者のことを考えると、躊躇があった故と考えるべきであろうか。

「明治七年七月七日、大雨の降續いた其の七日七晩めに、町のもう一つの大河が可恐い洪水した」これは確かな事実で、長雨の結果として明治七（一八七四）年七月七日に発生した「手取川犀川洪水」である。個人サイトの一部と思われる「向上藤棚の白山神社が流された！」

<http://www.nakaco.com/mizumon/food/kanazawakouzui/kawara/kawara.htm>

でデータを入手出来た。それによれば、『犀川向上藤棚辺の堤防破壊して新豎町、本豎町筋水害』（「金沢古蹟誌」）による）、『県下』、『大雨大洪水となる』。六『月下旬より雨やまず』、六月二十九日より七月七日『迄』、『特に連日の豪雨、犀川は』一丈二尺（約三・六メートル）『の増水、各河川も大水となり、』『県下』二百九十六『ヶ村で水田』一千三町九反一畝が被害を受け、『堤防決壊』は三百六十三『ヶ所』、一万四千九百二十一間（けん）（約二十七キロメートル）が『壊れ、橋の流るるもの』八十基、『浸水家屋』二千六百七十三『戸、潰家』三十六『戸、流出家屋』十三『戸、死者』二十三『名』で、五千二十一『人』が『羅災』したとある（元データは石川県編「石川県史料」の「石川県災異誌」とする）。ここで、鏡花はしかし、「其の時さへ此の川は、常夏の花に紅の口を漱がせ、柳の影は黒髪を解かしたのであつたに」と言っているのである。浅野川が決壊を免れたのは事実かも知れないが、金沢市内は広域で浸水したと考えねばならず、その場合、浅野川だけが、形容するような状態であったとは私には到底思われないのである。上記ページによると、金沢市城南一丁目六番地に当時あった『藤棚の白山社』社殿が犀川の決壊によって、四七

○メートル北西の『ふじたなしろやま藤棚白山神社』まで押し流されて止まったとある。浅野川は、この附近の東北を巻いて、低い丘陵と金沢城の北を廻っているが、鏡花の言うような、洪水下の中の別世界、桃源郷みたようだったというのは、どうしても理解に苦しむのである。そもそも、この当時、泉鏡太郎は、僅かに生後八ヶ月だったのである。これもまた、二つの花街の街の延長上に形成された異界のイメージが仮想醸成されているととるべきではなからうか？

「まち めぬき ついで町の目貫へ續く處に、もくきょう おほはし木造の大橋があつたのを、此の年、石に架けかへた」これは現在の浅野川大橋あさのがわおほはしなのがあるが、ここも記載には事実と相違があるように読める。本篇の記載は、明らかに、その浅野川を襲った前者の大洪水の起こった、その年の内の洪水前に橋が架け替えられたのだが、工事が七分という途中に、その大洪水が襲ったと言っているとした読めないのである。しかし、木造の旧浅野川大橋が鉄筋コンクリート製の三径間連続固定アーチ構造のものに架け替えられたのは、実はまさに、この洪水の四ヶ月後の、大正十一年十二月に過去の木造のそのの損壊・流出を受けて、現在のお洒落なそれに架け替えられているのである（金沢河川国道事務所のサイト「登録有形文化財」の「浅野川大橋」のこちら

https://www.hrr.mlit.go.jp/kanazawa/mb2_jigyō/bunkazai/asanogawa/history.html

を参照した）。「橋」は「端」であり、また、流れる川は人間界とは異なる水界への、言い換えれば、民俗社会に於ける重要な異界への通路なのである。

鏡花は、巧みに事実と虚構をモザイクすることで、我々読者をして、無意識的に、そうした異界へ、リアリズムとともに誘ったとも言えるような気が、今の私はしているのである。絶妙な本当らしさを持った都市伝説型平行世界の近代怪談の傑作と言ってよい。」